

RPK2023 報告



熊野真規子/齋藤結友/柴田香花/佐々木夏凜/渡邊拓海/(鎌田翔至)

弘前大学人文社会科学部 熊野真規子

交流実験「弘前大学×近畿大学 動詞的教養教育 2023」(2023.3.25-26)への参加に引き続き、関西大学・千里山キャンパスで 2023.3.28 開催された(初日 3.27 はオンライン開催)第 37 回 [Rencontres Pedagogiques du Kansai](#) (関西フランス語教育研究会)に、夏の交流実験に参加した弘前大学学生 4 名(+研究支援員 1 名)と参加した。次ページ以降に、RPK 参加日の学生アンケートを編集した報告書を添付する。なお、佐々木と渡邊は「交流実験 2022」の参加者であるが、中国語履修生で、フランス語については未習である。

担当したアトリエのレジュメは、以下のとおりである。学生アンケートの分析は論考に譲り、「交流実験 2022」に至るまでの予備調査の過程および交流実験プログラム概要の説明をし、時間を見て、りんごをめぐる日仏文化比較 を交流実験当日に担当した学生スライドを、急遽、本人たちに紹介してもらうことになった。

13:50-15:05 | Salle 2 | Hors thème | JP

「交流実験 2022-学生交流による地域探求をとおした地域への目覚め」

熊野 真規子 (KUMANO Makiko、弘前大学) [kumano\[at\]hirosaki-u.ac.jp](mailto:kumano[at]hirosaki-u.ac.jp)

フランスという他文化をとおして地域を再発見してきた「弘前×フランス」プロジェクトを基盤に、昨年度、自文化の深い探求をとおして他文化へと拓く視点の獲得をめざす「交流実験」を開始、「交流実験 2022」では、弘前大、慶應義塾大、近畿大の学生が地域文化・地域語などをテーマに対面交流し、参与観察者として複数名のフランス語教師が参加した。

事前のオンライン・アイスブレイクフランス文化体験としての「ペタンク」による対面交流のアイスブレイク、弘前大学生による弘前市の霊場・久渡寺とその周辺地区の農家蔵における地域性紹介や特産の「りんご」をめぐるフランスとの比較紹介のツアーによって、各学生が背景とする文化との対比を際立たせようとする試みであった。日本の地域文化への探求は、学生の内包する言語・文化の複数性の自覚に寄与するのか。また、他地域への、フランスへの、フランスの地方文化へのまなごしのきっかけになりうるのか。本アトリエでは交流実験概要報告、フランス語教員による参与観察結果などを素材とし、交流実験に参加した学生との意見交換を通じ、地域を拠点とする複言語・複文化の学びのあり方について議論を試みたい。



RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2023

@関西大学_大阪

2023.3.28 参加報告書

弘前大学人文社会科学部 佐々木夏凜

・日時：2023年3月28日（火）13:50-15:05

【アトリエ参加】「交流実験 2022—学生交流による地域探求をととした地域への目覚め」

1) アトリエに参加に際しての「目標」

熊野先生の発表を通して、交流実験を振り返る。先生方の意見をお伺いして新たな気づきを得る。

2) 印象に残っていること

先生方が交わす意見が印象に残っている。考えを深める上で質問や意見の交わし合いが重要だと改めて感じた。

3) 参加して気がついたこと

数年かけて行われているプロジェクトにおいて2022年の交流実験の意義に気がつくことができた。特に地域性の目覚めという点において先生方の交わす意見から、2022年の活動で自分が得た考えを、客観的に見るができるようになった。



【その他の参加アトリエ】

・日時：2023年3月28日（火）10:00-11:15

「授業における文化：教え手の問題 Le culturel et l' enseignant(e)」

・日時：2023年3月28日（火）11:25-12:40

「機会翻訳と語学教育—「避けられない」テクノロジーの進化とその効果的な「活用」をめざして—」 感想など

自動翻訳をどのように活用するのかという議論で、校閲できる能力の育成に切り替えてしまうべきなのではという議論が印象に残った。英語に対して、国際語、コミュニケーションのためのツールとしての役割を求めている研究者の方がいること。改めて国際語的に使われる英語について考えを深めたい。フランス語＝フランスのフランス語の教材を使うのではなく、フランス語圏のさまざまな言語の教材を使うというアイデアが興味深いと考えた。英語を指導する際にも、第二言語として使われている英語や英語圏の他の言語にも触れてみるのも面白いのではと思った。

AIとの共存は、どの言語でも重要な議題なので、なぜこの時代に言語を学ぶべきなのか、このアトリエでの議論を参考に、自分なりに考えるべきだと気がつくことができた。

RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2023

@関西大学_大阪

2023.3.28 参加報告書

弘前大学人文社会科学部 渡邊 拓海

・日時：2023年3月28日（火）13:50-15:05

【アトリエ参加】「交流実験 2022—学生交流による地域探求をとおした地域への目覚め」

1) アトリエに参加に際しての「目標」

特に目的意識のなかった前回の交流実験の記憶を、アトリエ参加に際して自分の中で再定義すること。

2) 印象に残っていること

当事者である自分と、参加していた教授たちとの間に大きな差があったこと。研究自体に前のめりになっている人が多く、交流実験というプロジェクトの注目度の高さを知ることができた。

3) 参加して気がついたこと

当時の記憶をさらい直したことで、自分が人間に対して興味を持っていなかったことに気がついた。文化を作るのは人間であるが、当時は文化そのもののみに関心を持っており、そこに参加している主体が何であるかということを意識せずにプロジェクトを進めていた。人間同士のつながりが文化を作るということを再確認できた。

【その他の参加アトリエ】

・日時：2023年3月28日（火）10:00-11:15

「授業における文化：教え手の問題 Le culturel et l' enseignant(e)」

・日時：2023年3月28日（火）11:25-12:40

「La construction interculturelle dans les manuels japonais de FLE : premières pistes」

・日時：2023年3月28日（火）15:25-16:30

「『フランス語大学』二年目活動と課題」

・日時：2023年3月28日（火）16:40-17:55

「日本語における複言語・異文化間教育の社会的ニーズ」

感想など

フランス語オンリーのアトリエに参加した際に、一切フランス語を聞き取れない状態であったために、アトリエの内容だけでなく、その中で行われた雑談も一切分からず、とても疎外感を感じた。フランス語に関わらず、言語や教育というもの全体に共通する考え方を学ぶことができた。非常に本質的な議論であり、人と関わるということの重要さや難しさに気づくことができた。文化のステレオタイプ化という問題は日本文化にも共通する問題であり、常にいま現在の文化を知ってもらうことの難しさについて考えた。フランス語を学んでいないため、何も聞き取れなかったが、逆説的に言葉の通じない状況に放り込まれるという、貴重な体験ができた。フランス語大学に興味を持って、実際に参加してみたいと思った。教育が何か、フランス語の教育をどう進めていくか、というその必要性を、思想的な側面と実用的な側面の融合で理解できた。



RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2023

@関西大学_大阪

2023.3.28 参加報告書

弘前大学人文社会科学部 柴田香花

・日時：2023年3月28日（火）13:50-15:05

【アトリエ参加】「交流実験 2022—学生交流による地域探求をととした地域への目覚め」

1) アトリエに参加に際しての「目標」

普段は見ることのない先生の研究会の様子を知り、新たな視点を手に入れること。交流実験の発表では、自分の役割を果たすこと。

2) 印象に残っていること

交流実験における先生方の視点が、私は全く注目していなかったところにあった。渡辺さんの班が、ツアーの反省についての意見が多かった、という点は、発表を聞いていても何か疑問に思うことがなかったため、先生方がその点に注目していたということを知り、自分も活動の中でそのような視点を持ちたいと思った。

3) 参加して気がついたこと

「教育」に関して、様々な観点から研究されていたが、「教員の適切な介入」について課題を感じている先生が複数いらっしゃるということがわかった。

4) 感想・疑問など

今まで、先生方の教えてくださる姿しか見ていなかったが、「教育」に関してこのような取り組みが毎行われていることがわかり、先生方に対する尊敬の念がさらに深くなった。

【その他の参加アトリエ】

日時：2023年3月28日（火）10:00-11:15

「日仏共同教育実習プログラムとその実践：留学生と学びあう場の構築をめざして」

感想など

「教育」に関して、様々な観点から研究されていたが、「教員の適切な介入」について課題を感じている先生が複数いらっしゃるということがわかった。生徒主体の取り組みにしたいが、アドバイスはどこまでしたら良いのか、学生はどこまでのサポートを望んでいるのか、など。留学生と学生の交流の場を作る機会として、LINE グループの作成を挙げている方がいて、国によってはLINEが使えない国があったりして、留学生はLINEを使うために何らかの手続きをしなければならず、手軽にできないということがあったので、どのように対応していたのだろう、と思った。

・日時：2023年3月28日（火）11:25-12:40

「La construction interculturelle dans les manuels japonais de FLE : premières pistes」

感想など

ほとんどフランス語を聞き取ることはできなかったが、母国語ではない言語で授業を受ける留学生の気持ちを少しでも知ることができたと思う。また、いくつか語彙を増やすことができた。スライドにはあまり文字を詰め込んではいけないと今まで聞いてきたのだが、詰め込まれていても、構成や文字の大きさ、フォントを工夫したら見にくいことはない、ということがわかった。



・日時：2023年3月28日（火）15:25-16:30

「フランス語大学」二年目活動と課題」

感想など

料理、菓子を通じての交流は、きっかけになりやすいのではないか、と思った。

・日時：2023年3月28日（火）16:40-17:55

「日本語における複言語・異文化間教育の社会的ニーズ」

感想など

「人権」は、異文化を学ぶときについてくるものだと思っていたため、「言語教育」の中での「人権教育」は考えたことがなかった。

【全体の感想】

とても個人的な感想になるが、ムートン先生にも松川先生にもお会いすることができたのが夢のようだった。先生方のスライドの使い方が参考になった。真似できるかはわからないが、今後プレゼン等をするときに構成を考えてみようと思う。

RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2023

@関西大学_大阪

2023.3.28 参加報告書

弘前大学人文社会科学部 齋藤結友

・日時：2023年3月28日（火）13:50-15:05

【アトリエ参加】「交流実験 2022—学生交流による地域探求をとおした地域への目覚め」

1) アトリエに参加に際しての「目標」

2022年度の交流実験について、自分が関われなかった点や反省点などを知り来年度の交流実験につながる目標を持つこと。

2) 印象に残っていること

先生がお話していた「雑談の大切さ」については特に印象に残った。「雑談」には相手と目的もなく話すことで視点がずれたりどんどん違うものが見えてきたりするといった、フィールドワークと似た点があると感じる。夏に参加させていただいた交流実験やマルシェでも、合理性や有用性からは得られない気づきを発見することができていた。これこそが私が知らずに学んでいた「雑談」ではないかと考えた。よりみちが血の通った丁寧な人との関わりやコミュニティを創っていく。そのようなことを学んだ交流実験だった。視点の変化が全部をおもしろくさせるのだということを現代に大切にしたい。

3) 参加して気がついたこと

夏の交流実験にいたるケイさんのお話やゼミ生の先輩たちによる準備の詳細など、知らなかったことを今回の発表の中で詳しく知ることになった。来年度は準備する側として、異文化/自文化を発見していくことになるのだと楽しみになった。



【その他の参加アトリエ】

・日時：2023年3月28日（火）10:00-11:15

「日仏共同教育実習プログラムとその実践：留学生と学びあう場の構築をめざして」

感想など

フランス語学習者の日本人と日本語学習者のフランス人のお互いに完璧でないからこそその助けあうことができるというクラスが魅力的だった。教員が前に立って教えるよりもむしろ、学生同士がお互いの先生となり教えあうことで相互に高めあうきっかけを与えようと思うと感じた。

「日仏共同教育実習プログラムとその実践～留学生と学びあう場の構築を目指して」に参加してフランス語を学習する日本人学生と日本語を学習するフランス人学生との交流によって進める仏文クラス。日本語学習者のフランス人が留学生が日本人学生の仏和訳を助ける。フランス語学習者の日本人が問題文の読解や漢字を教えることで互いに「教えあう」交流の場が生まれる。考えたこと → 留学生はせっかく異国に来ても、うまくその国になじめず孤独を抱えることがあるかもしれない（弘大でも、留学生は留学生のコミュニティをつくっているケースが多い...と思う。私自身あまり積極的でない...）。学生同士の交流は積極的に踏み出さないとなかなかその機会に会うことができない。その点で日本人学生と留学生の交流の機会を与える多言語のクラスは、お互いにとってその壁を崩すのに役に立つと思う。一方でクラスは与えられたその場限りの交流の場になってしまうのではないかと考えた。あくまでもクラスはきっかけで、実際はその場以外の交流は学生個人の積極性にゆだねられているのではないかとも思う。

・日時：2023年3月28日（火）11:25-12:40

「La construction interculturelle dans les manuels japonais de FLE : premières pistes」

感想など

わからないフラストレーションを感じることができた。他者の哲学に興味がある私としては貴重な体験だった。

・日時：2023年3月28日（火）15:25-16:30

「「フランス語大学」二年目活動と課題」

感想など

「フランス語大学」は何度も参加させていただいていたが、コロナ禍での先生方の工夫など知らなかった点をしる機会になった。後半のグループでの話し合いでは今後の「フランス語大学」で取り上げたいトピックなど、ディスカッションを通して各々の興味関心などに触れることができた。アトリエにても他大学の学生と交流することができよい機会になった。

・日時：2023年3月28日（火）16:40-17:55

「Enseignement du FLE dans un pays multilingue: Quelles approches? Quelles langues?」

感想など

わからなくてもとにかくフランス語に触れたかったので見学した。ムートン先生後の目標として、とりあえず意味を取れなくても音として何が聞こえるかということに注目した。内容はアフリカのマルチリンガルの状況について、ということだけなんとなく分かった。一つだけ、ムートン先生のアトリエの時よりも、フランス語がマジョリティの場での外国人としての（私の）恐怖は少し軽減したのじゃないかと思う。分からないから行かないのではなく、分からないけどなんか怖くはないなとその点で成長があったと思う。